撰集抄第六目録

一 唐之帝子事
二 西山猿定僧之事
三 相摸國太遊僧之事
四 仲善空也淨蓮生所事
五 惠心僧都水惠觀事
六 無相房名上座事
七 兄緩上人定中成不動事
八 義系云民士宮仕僧之事

乙曜文庫

撰集抄第六

一 唐之帝子の事

むかしを語こしに帝子といふ事ろ人侍りさぶれハ
我朝の大史の史なるんとやうの人ハそ侍りを御
楽朝の御代に仕へて[illegible]にこなふけるに冬の
日くれやすくて白鶴にしの山にかゝふに金鳥東
の方に出御ほとにそうすまてくれて我家に
ぐさわき侍りて我の史わる御そくり見す金
人一人をなんぞしてけるの道にそ越られる御
いとく我に文あれて人御とうむ御里の大を侍へ也
只そこはるとなく荊棘乃うへに白雲すろうし

法を問ふ。求柱にむすびぬ。谷の木の紙ゆゑしをとる紙
者はかりぬ。心ばかりそ。雪と多紙。人里をはかりにさりぬ
ん紙なくさむる。雪の雪のうちにしつたに雪をつゝ
いとゝあぢ紙なくそ侍りける紙がくて程りかとは
かなりに火の見えられたりまつしく覚えて。弱紙をや
めてをくなんる紙兼くがりくしたく。暮つさて見
まを空。塗あれて内を更にそしなるに。実はる
くらうたきにようたうの髪ゆりを着て。琴紙
引ちんへり。おは非ならんと見紙同めつらふ覚え
ていろ紙門をゆゑして。霜からんといふ。
此女房とさらあるまて。海川にしたをハ

ようずとをくたるちはるを。程あるからにしき
まへぞはりうち。音めらひくさらだ見へとうくへり。
あらハにくそさを。何だまて見て今まにふ。閑まてを
さはやうなる風り。雪燃其雪に火の紙をそく。帆帳を
たまてり。風、近付みまはいよく。遠まるまく侍り
ずる。琴の音はまりもおとしろくぬを紙をとる
まくそ侍るぬくをかく。野原にそぬ。何とくすを
おりしまはぬとおがつかなくなんといへだ。此三年此
ゆゑ紙り。往侍るなりとおうふかくて。時の月も
かけうすくなり。朱をやう風くしかりかく
野寺乃ちまをぬのうり。梶の下にをちて八なる紙をを

りしにかゝりける事ハ。此嵯峨帝子ちと宮方とハん侍りしかれと
廣くある野ハらの中に。一むら立けまてる中に。死骨ハ
中にそのまゝかけるかさましきかなしなくて。苔
おほひ侍るまゝ年月のふり給ひ侍く。星月つき
て此聖の中にも入くの前にまゝそのなする事しうそかる
事侍ともや申ましは聖のをもつとも。おろかにしもたらむ物
ひたる夜。其の跡をん此聖より梅坊といふ人。このめう
清くし気む侍めりか常に筝をなすん〻侍り
父母より侍き。是かしく世海とりしたかの聖の事
月にさらくあり侍るくさ河ホまく。白骨をむかへ女房
まことに筝をなすん〻なる事とおもふ入事くとうらう

侍らく侍りしとかゝしきにこそ侍る。是はされたいかなる
事やらんとおもりしかも思ひより清き事しく物語
あまりに死して後も野ハらの聖をんかりまひききかくかけに
おはをめゆかへ形をあらはしひきいてゝ。琴をひくたるにや
とをしとおもそてる河となくおそ編しく物かへ侍るま
ととも又縁なるにゝも侍る下しは侍まは河くのをとんなり
いとゝ嬉まんは思ひやりし。其事にこそや侍るまし

三 西山禅定僧之事

中院師大納言雅信卿の、山の花みんとて侍るへき
よし人々ともさそひつゝ大井川の紅葉のちりさく
なかむとてハ川のほとりにめくらして面々に並くらふ

花の波ことおかぶきどくしに海じるわざ城なんな事
ひとくん城いらまし めぶる花風をうらみさんざして。
日城くらし諭め給へりたるまぺらこりのまむかひ給ふ
まつぶよせらく おのくおまたち麓よりち谷りしぶ
まくぺ何をひなんとし給たるうりぺ あるまれのとうり。
よんひ又そしばかりなるのがこびら一川をなんきたる
僧乃禅定を待ちり人こそ付くむらぶまちあてく
何事をし給ふ人そいはくのたまりしといへる人なんと
ど望ひられたるうりぺ落たりれいらくをせず屋く
ほど風こく光人まで何とてきまるは来り給ふにしと
いかりぺ経信こそくられたるやうそぺ家を花をみたり

まきりとのこまつまれたぺ此僧家を志のなるまといふ成
かく思へたる人なんとみたく事まへぺ法文のんれたる事
ぬべきよぺ給ふさらせらるぺ何なぐらりせめられて。炊脇即
美提生死即涅槃といふ文をそ論し待またるぺ行まれ
しそとよぺ望く人まそおかせさるまゐるにとくぺかさまく
此文のんなんざどひあはまけまは実日法のやうを暗
待ぶりいひたまへぺおのくやかくのとゐまおぼし。
同行とやなりまし此おかゆるかどにそ待たるぺさても
此刻しつまぺ山りまとまゐるく独人をも望ぐ行まれ。
さとまは給りんまそ行るまに待まとも自利と他人平
等をするこそ美薩の行まへ待まは来さ海りむ

を掛ふ。さて此度紙をさしてゆきて来をなりたまふ事なれ。
をとらずすぐとく我侍る。結縁よりとむるしかし
あれば此世にまゐりて侍人にはよしとおもせし掛紙

三 掛摸國太遊僧事

むかしお摸のくにに犬庭といふ聖の中にかゝる所
おとくれ唐むまびくおまる僧一人侍ぎ時に里より
出て掛紙こふてく命をはぎ人にしたり里にて勇を
たまうるはうれこと紙なし。はぐ世紙をとり侍る
とりや掛まる里より風んちぎをびまくしまたやり
て鶯早志所んなるく病をまたりぎ中にすする
うことなくまくしまりのく史をまぐくにる紀物に

ゆるして素なる里言するりの文かれ病紙はぎくやこ世
里なりぬ屋をばらんまくし命をはまがらしたり御し
て語まくらと覚えはぐのちとまくぬ屋く侍る。
里れとのくしたんしたんなるを此僧御のきて
乗る人にとしたまはぐの所にゆきまくしたまは火も
ことはぎ屋こく御ひくぐ正気と侍らぎ里言するを
なくしらくしたげ見て掛おかゆるかく見ゆる時に。
気佛をすゝめ言りがくく屋こやくんちとに当に
しんゆる時まぐ忍といはぬ掛ちまぐしてぎくめて命を
はぎ言りぬやこ当る母にかゝる掛を侍らしたん
此僧れ里くり思りて殘筆紙こひくぐとくいとなそ

人まじはりもなくして念仏さへ人々のあるにも
なかりけり。世にまた変化しく光仏をやけかせるにや
此計り別のものとも見えざりけり。おのれはひとり
ひそかに侍しひのみおぼえ侍る身のうへひとつ。
なくなりておはぬをとげてれいのとなすべき枝
まで記するまでと思ふ事ありけるにや。かくて侍る人ありて
やがて延久のころ、彼の庵にて三月二十日
日ごろおもひきりし臨終とをげ給ひて音楽そらにきこえけり。
かのひとやう室にみちて往生しけるとぞ侍る。
その後とくえんなる此人の書き置き捨遺侍りける物
をもとりて披見せしかば、いとあはれにて

産衣の庵に上人ありしが、我身の事に飢ゑを忍び、
大悲の室の中にて閻提の人をひとへに救ひ給ふなりと
侍るこそ、有がたく覚えてかなしき事にて侍れ。そ
れ此ごとくの人と発心やと思ひ侍るなり。

四 仲算大徳空也上人浄蔵貴所の事

むかし山階寺に仲算大徳とて、いみじき智者侍りけり。知
恵の深き事、仏のごとし。仲算大徳とて
ありし、そのかみ空也上人の室に来りて、其
まなこを見るに化人と疑ひ侍るが、此人いまだ菩薩
の空晴に僧都の室に来りて、空也上人
に会ひてむかへとも空晴のことを語りしが

なりおはし僧都他行のひまにて此仲算大徳の
喜にてあつまりけりと萬め給まにたりし僧都を
とめへ出給ふよし聞空也上人りやうく給ふよびつを
此兒乃ちとひとりあるをなにまうひく内かへ入て
あれ圍碁をんきとくいまそよびごおりてんせきらん
そのくさまりせ者まはは仲算にごんをれあせらんとし
給ふみし文はおづくさりけるとど上人入給ひくざらくで
此念珠を盤上をよりおき給へとおまはは討じつきあ
のさまりせるまくにぞて給ふくでんのまうりま給ひさ
まて念珠いきでんのおしようら海なる 討しつまの
来まりおくまりにそりとやはまつて仏法の終よ

をはりし給ひて猶こそなりまりけるとぞ申伝侍るが故実也
上人まで延喜帝の皇子とも申し又捨勤抄まで化人とぞ
申しつたへけるとかやさりければかへりて人の世を去は
んなる念珠まひくもぞく流るぞくあつかひとしするのを嫁し参
みしこと侍りしりし延喜の御代のまきにて流しし給ふ
此仲算大徳同友あまりにかざるひくひつまのうらへ
隆給ふしもひそくまり天下目でりぼくくせて
ぬきたなすぐるもみなるひくわかれてうちえはまれてとの給ひ
らは侍りけるを何事とも仏かさりのうたけりや
侍らまえん近江國りある山寺へ立ち入れまけける
まくかの寺に来りまとなり参りくみ言ふなり

ある女は水をいつぞ米行者をぞ仲算大徳つりまた侍
ちとのごう侍かさんやあるりし此女いふやうそれと者
なる到しまた水をもわりし出しのミ給へりしぞ家と
ち侍くの前よりがらなりして没する物ごい給ふべき
おとゝるなりしとおもへ者まは此大徳ざうなりけらだ
水をさりしてのミなんとくぐ山は岩りたしまより
て鍬をぬひてく山はたる後間給ひなり事れば実ありし
食清水は水はだきのおとくはくなりまた出侍り醒井の
土こげといふそこまなりけり掬ち里はものとも同もめづ
難ふ景さくおとりもなれめなくすぞ浮まいかるる
目でりにもんぬくぞ給ふるとかや掬ち水白色くぐ浮

蓑米前のゐらしけるが此土の社をゆ給ひてぞ
もはらだ結縁せんとて又まそだ後はらまたり者
まはざ給乃よりまはすくなけまとも清の社なりまた
まれそりが醒井とまはおまり侍るゆゑまた同出度
いまそうまけく人こうれがぬくし此仲算大徳は善尾
まくぐ平観音とゆらたまてく滝りはたひてぐの
かり給ひし社ちまぞ又もんく給はまかく侍るはつう
せりが久遠の世界の如来にくぐいまおうまけまはがやう
の姫しぞも三ぎんし給ふがあらすしもおとろき
さわぐ色給りしも侍らまぞ浮蓑を善事和社ぞ所
土き八男おうしぞれは八坂社塔のゆがめる後いろ

る所しが父の妻おの公れ此土乃孫つもまくざるも給しま
一条れたりし乃ととに行あひくぎ土ぢらるゝ親法し
て蘇生しまられたるこしそ僧へ中も有りなく
侍まぎ叔王二条のたりしをかがとり橋といへるは妻おの。
よそがへり給へる由へりし名付く侍る源氏乃宇治乃
妻にぜくまうへるたりしなるとどがんあるは是なりとて
行住まや中法まし宇治のたりしといへるまでおやす
まだ事しまや侍らん

五 恵心僧都水想之事

むかし延暦寺より恵心の僧都といふ屋んことなれ
人おもしまりが常に氣法を除しうぐ家有

一家ぬことくなら水りなし給ふわざ所なんし行
ひたるおるこれ内記入乃保胤ほうじやう所ざうたん
せさほしくて恵心の僧都所寓りおりして常に
まこと給ふ所をあまくゝ乃給ふよがたまくて僧都
もまこく行ひ所ばりさ毎にもやうなるまとおりして
出られたる時おこるまりし極所あり宇る所ぬ所中へ
なお入てく為らまにたりがして次の日又門記入道乃
おりし侍たるまりし僧都尉所してやけまたるまぞれ
りしのむしまぶこれまくしを投入給ひくぶにむつ
かしまら侍るまりしぶれて給ひせなんやとゆかて宇まは
入乃ことゆくし此人ゆくいまそうまけまは此所しゆ乃

るき頃まゐりしたりしが宗乃法をひろめさんと思ひく。
一乗円浄乃書の花もそなへひきて寂寞たり。かゝる秋の夜
ようぼし禅定合掌秋の月をひとりと密語の
内に入りして弘法大師乃むかしの跡をおもふ。
伝法院といふ寺をたてさせ龍花三会の朝を待給ひて
入定し給ひけるや。時の人はさみしくあはれなる
おもむけるに成就乃はじめなるとて候を
あり、せしかりこれは掉さしてひらくもの伝法院へ
まゐるも東我乃寺より、この合坂山より鞆江や見ん
こゝ誠をそしのぎそひぞ、まりはつまりくたりくさ
い創しこの寺も一つとなしてくだ、と更まさのあくるほど

なりけりし伝燈の事もとぞ常のごとくまいし奉る類なり。
うけ給まくに本寺の僧徒あはまちそでおのく参
むかるやう。南銅六千金剛は大師乃弟たまへの人々
堂ありいまつるてなる中にて世下て高山にいたりしが
行法ある者なるをもつての大師の御まへこぼし
くいはるべきぞや伝法院つかせてく彼覚鑁か入定
はまゝうんと義して仏上よせありかくだん乃
門徒ぬをせくたをもちりなしくそむすくりなるま
侍りぬ本寺乃僧入定のところをみてまゐりけるが
まつ不動乃尊二体たちしの常り。一体まで覚鑁の
身しちの本尊乃不動ににありしままに今に一体は堂

の化しうぞ和尚。但いはまとぞんとおもひ。
いうぐすべきと半あらひかるなり。或僧の一弥乃不動を
はぐりなりけまいずこしあらてかりありしけまハ
あまてしそ覺鑁らとくぞ太刀にくく切なまてうも。寄
きまさまけるをなじりハとていてくまるなとなり。
覺鑁定はめくぞはぬりまらしれくりがくりたれハ
人とも谷へたるへくぞ海りにかりまた覺鑁しそこ
んまを海りせぬとさう那。家此山りはまじとうゝ
紀伊國根来といふ家なり唐紙むまびくたり
者るか七十二ミ云ける三月十二日なん往生の素懐
をこけ給へりぞかり吉樂中なく北なり花ぬまて。まに

まぢひあまらゝ殘りをとるまへるとなん。梅とりさ
玉給へるおとなの和なり。禅三條の時。家を謗じ
家紙を書るましとうとがら紙を。なるくぞなむ。
がまなり思ふなし。信謗同じく利せんとこそ。
出玉給ひたまぞ此ことなれ。刀にしてだけとく
そ侍る。侍るみ形たまゝ。家まる紙せよとこそ
思しめし侍まと人あつまくはこる紙まくに出給。
こちらなりてあるなりまなまぞ此聖人は大師
のまゝして定りいらはくそだまゝ。ことあつこぶ
聖紙なり。是をそなめ言ん心。とまゝ。おそ語しく
そ侍る。此覺鑁をぞ人まはいませ。ぞるまるらや

白河院の生身社御をおがみまいしせんとてく七日御
いの事侍り着るゝ七日にあたる歟社内夢ゝ明日
乃河時ゝ寄賢の者とてく僧のさゝめり侍らんをおの
ませ候しさせ其後実社生身社阿弥陀にてくぱま
せんを侍とて侍んしてく此夢さゝめ侍せ給ひよかり。
かくて御んりとなくいのちある者りしまいしんとし
まうさせおはしゆまに此聖人寄野ゝ侍法院こん
まうし社ゝ事をやさんとてくまいり給へり着くの我御前
へめさ物給ひ事者まは家ゝ見えたしてく院の
御同事ハ見えさせ行ひたまハ此夢如しぎこゝし見えて
屋がくまかゝ庭を給ひせけるとや侍らく侍りな弥陀

給ひすゞる我兄史ゝ化同しましくて家ゝ事と知
のさうくは様乃たゝめよ孫をむまひてく安書男へ返
ゝ事給ひ事ゝ出ゝもあとゝを寄りたまゝとゝもこの
まゝを見ゝ事ゝ給ひしなゝこゝ事出ゝく様を
共ゝりゝ事ゝ此事は無上念事社内の御國ゝ
生まゝく如くく孫をむまひ事ゝやらんとゝろよ
きものを しきおがへゝ歎きある時も此御名我
こゝへ君のさむてくかて乃ゝりしまいとかこつゝこ
とゝ御名我中せは孫孫いらく添くそ見侍る
八 義家ゝ云義士ニ宮仕侍ゝ事
むかし住法國ゝ一条次郎義家といふ義士社中へ

はこなすがちなる僧れ入るまゝ家ぞ人をまてまゝしん
といひ事まはぞまゝはいはく此者ぞと云ひ遠の
寺家の者ふくゝ侍る年ニ御薬ふくゝ作とのり
あひかゝるまてなんとも御侍りけるかけかちすくゝ見る
てのちまゝ河ひかゝるまゝ命をはしゝ為しともなき
まゝこれ乞食なんし侍るといふをかゝぬし所ゆまゝ
こんゝゝおさに居り報食物まゝ一日ひ一合ばかりあぐ
一度年の中ばかりかゝるひ寄るかはとてなにも
くわぞ人乃あそれひゝくよ御身のなんぞ成をしまゝ
ともがひてくわぞそ有ける物をもいそでんとくはの
まゝけまはあるじと又なれ御身の思へりだまゝ

いとをしゝなつかしきん侍りとゝく僧をかゝ者なり一年
なまり此所ひあるけるかぴかなり事ゆまゝ此侍りける
まやぐ御者をさとくにうせ侍るまぬあるしを物めて
あるまとなる人さとおもひしかはる物をとゝく泣
うれしひかまとも更ひかゝるし報りのまゝはる事成
あるまくみまは実めてたまかほ語ふくゝ日にのき成志
侍る河事そとゝ人まはいくゝ歳ゝ此日乃焼をこゝろ物
おりひをなして怠佛三万返中なりゝ又そら日ハ成此な
うはより辰の中まゝくゝ産穢しぬ次此日まゝ不浮観
ある所ゝ唯穢観を修をなんといふ一筋ひ観法法
とめ此日紀ゝゝ侍る見をゝん新ひ孫ゝ

[illegible]

撰集抄第七目録

一 山居僧之世不可得親信事

二 宗明伝物漸適哭跳事

三 大智明神之御事

四 廉潔火明神之御事

五 歓喜男山伏笈中入助事

六 山居尼念仏往生事

七 小聖堂[illegible]詩作事

八 朝良者竹生嶋并朱雀門詩作事

九 清桂公并野相公事

十 大江相公再白樂事

西行記

十一 小野の大臣之御事

十二 直轄流罪仗ニ神勅有ニ此度免ル事

撰集抄第五

一 山居僧三世不可得親住事

長谷の寺の年。出家乃至ことげて。世に祀ることも此道面向ふ所をもとめしかし。覚えく。吉野山よりて。三達をおくり侍り。山の有さ毎花の。本ニ此海ニ浮て詠なるゆゑ。ほとゝ思ひ屈ましにて。花面さるまゝ面向く侍ることなら。此をまてまさちさ。深山の嵐を花の思ひしよりも。樹を富て咲かりけるを。海めぼらかり侍り。上下の此方の。安禅寛塔の御あるを。ほとゝ見るうらん。もらつゝ。ぞしかしく侍るべし。さきハ此所をもとゝ海つもらゝ。学ハ侍るましまくに。三年を。ほとゝ侍り。詠ける年

の三月は、御庭はおりぬ。山こくらの花も見みぐるまでよ
よめをしろくなげめわ
くるまで侍るなり。年あけに
なる僧の突はしられおもるるかぎりに、はだなりとに菜はつ
はありまるか。此花のさくこりよるまはくうら屋をうて
ぬるるをおらむじざん乃ものや送んなんと侍らんと。
世はをだらく侍りぺ人は門にりぬーずて被はおろく
侍るまぐ候し侍るしふーぱらとうら思ひ、ぺぺとれ
たるらかりて見侍して侍るるは此僧乃立出て侍りぬる
とを侍を侍がさりまいまるぬぐひ屋ぱん
まてこ給へぺおまは候とてもぷんはごまべきりぬらすぷその
うへおなるし侍性を持なしるへなりぬ侍こしもそだ

ん侍しと思ひるして、さぐるまで花なるから給へとのひ
まるまり此僧うまし
侍りぬまもさてこそ屋山さくらはのこや花は
ゆまりまるさんぐこそ見侍まるぞちにまくまる庭
さにぬく人まそおりぬ勢さまりを思ひく
さり思さまを花をのこまり格人のさけはなすこくの
なるめ侍るらんと思し侍るしぺ此人んよせ筆に
思ひくぺ事も此山のおくるり世はの屋侍るものなり。
ありして住家ぞんは給へりしかぞおまりしはぞなひ
はまてぺぷりぬりなる屋は。さくらは屋あ平さげき
侍下ーイ。おの此家頭りちて上はぬ事。我らぐふとにはまま

りして悪ある輩の外にて露の命をきる物とは侍らず
人里に隔りて思ひをこらせる庵ならんと見え侍る。
いと浦山しく覚え侍りしほどに其のきこえに侍りし梅と何
さして後世の為にもと書つけぬべきことを書つけ侍し
くぞ三世不可得の観をこらして思ひ侍るに残りてこゝろ
き侍しめぐり廻りの常の所作をとこして思ひ侍りつるに。
かゝる道心者めぐりいましめけるものゝ脊しさく
おもひて此書りすまんかどもこそとぢ記置きてかへり侍
ゆかしからしと侍りし道心者を残りて見えく侍らしとふかくす
見るくに三世不可得の法をとりを記して見るくおもひ侍らん
いかにもしつゝかなくと見えかなしく残りて侍る

三 宗順阿闍梨信敬者遁世の事

ひとしは叡の山に宗順とて名人侍らん。消なれは観音
まへなりつる般若の恵りの観音なる風とおもひその
あつまけりまては宗順の堂なる練りがしこまりて侍りし法
本寺によりおりん時りはるとぞ見風のためによりなく。
おもひくの坊ことも奉りて八乃舎を修めらく
なる身より心の観もかたのためにも為にはつかを見ていと
見えらもそうりまて徳ぶし深きによるまく今度の命
まそかの偈べし此にはとよく覚さめ侍りぬ。
侍りまては何よりのありなくさりがたくはなれり。至りて程
の為ぬをやと思ひつゝ叡山よりのかゝりつゝ出で侍り

二三日後ニ永祚の風とうく来れ世まさくやゆる風なり。
はなきは程儀なり落ちて人の家十万ばかり打ひさがれて
命をうしなふ人数あまたに侍り。此宗門法を打留さか
まつる内にてなんなる儀のるゆなきは誰もはとて
ゆ遁る人ありなきは却かく死に侍しかり。此宗門打
ふし持仏堂にはとめしかく侍るか家れ望さげる
海所に此本尊れ等身の観音宗門の上にあひ
おとれるものやまち。露えんかりなかりまたりぴと如しき
みそ侍る。泊瀬にてくれし姿なり。露たがはさるなり
観音の利生方便おとにあらんにそ侍る。ゆくと
長谷乃観音本尊れくりんとんなりしぢからを何に

給ひて宗門阿周梨が命城たまけ給ふなる事
そまとよりて此観音とは長谷のくりんなんまちぞ人
なりて持仏堂城は長谷堂と我ゆ侍くんなる。
大聖の化用中出るも中くお給ふ侍まどおまそ
いとふしきにそ覚く侍事

三 大智明神之御事

伯耆國なり大山といふ所に大智明神と申神御
ますを利益れ出ぬ事なるゆ。実物れ日の山れ端に
出るがおとくに侍り。御本地を地蔵菩薩にておはし
まはしぞ。むかし後方といひたく弓矢。聖なり出ぬ麻
を持重るかとなり。例よりも麻おかくて皆ゆの

和ゝ所ゝ殿ゝ御ゝ所ゝ掛此麻ことを知んとなるまゝ
乘持仏堂ゝ子弁此地蔵をぞへたゝく御ゝ所ゝ
五寸の等像は矢城射立ゝく麻と見ゆるは地蔵ゆゑ
おもしゝ者るぞ時後方あさましく見へて
地蔵ゝ知つきまゝりてなれ知ゝ所ゝ御ゝ所ゝ
ひなし屋ゝて御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ切て乘ゝ城堂ゝ
御ゝ所ゝ乘ゝ殺生城留り侍りにゝ其程は稱法天皇
の御時社ゝいたひ事れといふ俗宣侍ゝ屋ゝく堂と
屋し給はなして大智明神とそ申侍る利益所ゝ
多ゝ事は彼所の所だにと夕にそ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ
に下ゝ御ゝ所ゝ下向のおもひ出まゝの君乃拾ハ明神

の西方ゝ御ゝ所ゝ皆ゝ事ゝ侍ゝ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ
り侍ゝ事ゝ御ゝ所ゝ草木砂まゝ事ゝ御ゝ所ゝ
わさ実ありかゝ事ゝ侍ゝ此地蔵菩薩の中ハむかし
慶国女と申侍し時母尸羅善現乃ためゝ堅固此大殿
を發し御ゝ所ゝ此宿殿を立ゝく除しあゞりまし
て今等覚無垢のおさのとハなるまゝ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ
の国位乃行をいたんにまゝ何の仏何此菩薩ハ
及び給ふ事ゝ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ
勇猛精進遊諸菩薩と侍る其の所ゝ御ゝ所ゝ此本師釈尊
功利天の御りとにゝく二佛中宮此宿生ゝ御ゝ所ゝ地
蔵化導し給へと仰ゝ事ゝ御ゝ所ゝ御ゝ所ゝ

ましく侍り仏智とはかしこき弁のかたをおもふべしと侍る
なるべし中にも今の大悪人乃殺生やめんためなり。
鹿乃姿に現じて狩られ給ひ尊像をあらはし、
罪悪のおもきをしらしめ堅固の信心をおこさしめん
ためなるべしとかへすがへすもありがたくおぼえ侍る

四 鹿嶋大明神之御事

治承のころ常陸国かしまの神宮にまいり侍りしは。
御社は南むきにて侍り前は海にてひろびろと
廻廊かまへたるさまにて廻廊軒をきしまりてひろく
させる御本社格まことに有りがたく尊く侍りき
またここより二三里ばかり東は海にて限りもなく

侍りきは蛍のみぎりさかり時も舟のかよひもなく波のたて
雁がねの月をながめさ沖のかた山のかげ侍りて松杉にかかり
なく声もきこえかねて浦波にやすらふ苔むしたに
寂寞をそそのかせる聲の鹿おもむきに侍る猿の声も物ごとや
おもひ松の風にふかれまことに侍り東西の
色なれきは花はもろく散る花ぞありきは名残あるにめぐり
梅なども色なく侍りしに御殿のよそほひさく
の七日ばかりこもりて侍り庭ばかりさく梅の
侍りし折ふし塩みちて花のおそろしくて一むかし
よつてむかしかはる入江くすりかわりに侍りし
かかる廻廊の内まで入りて深山恩推もたたるとしき

まてこゝに侍しが屋うくこゝにして未成しく思ひ
りんなれの被うちて思惟佛道乃ちを稱ずかぐやゆと
穢宣侍らく損ひ給ひなんと侍るしにしそ實神と
おりしまし常るとハ覺へしぞ中ハ家ある神護
愛雲ハ法相を海をらんとらく三笠山ハ稱りぬまと
と此不識を捨て豈にせるゝ我ぞ尤たくせんを侍るし。
扨も塩れこの時をおかく此ノ海くげ波りしてがりて御
てんまく壽しきの神とれまぞ侍りに海まは日ハ二度
まいり下向ハしゆくあぞ此ハ公然孫むるしらして定く
巨益ハあづからんとなれは侍る又を侍かハ此社ハ
神の常ハ此社侍りぞさうかし中三年んぞくの神ハ

おらし海をなりぞ天下とをらさはれぞ海んとらひ行
へりぞ霧ノ下里ハとぶ稱地をはなまは鏡ゆるにかゝ海。
いまゝ天の命ハなりぞまはぞ此ハ鳥獸かすやくにあるゝ
る侍らんがく此ことくにおかしてぞらをすをもらん。
かまゝ此たを當んと思しぞ當る仏神ハかく海しませとも
氣ハ長深此云あはくおかゝくんのを是ぬはどうり。
仏神も利益ハしとし給のまし海をぬを侍りおれ
云下なるまゝる心の形感障を對治のある物をぞらくゆ
海してぴりし此ハかゝを行ゑなくぞしまそん事
のんうけよぞいにせん〳〵

五 歓喜男山伏笈中入助事

おなしころざしの方へ降行し侍るしに甲斐の上ゝ日
まゝ雪はりり浅岩のごけまはけふりのこゝ心がそく立のを。
ありさぬ信濃の国やの乃薄りて雪らるまゝ下紫を
ゝ此の雪を此れおと思ひまし行。海のくまゝの漸のまゝ
ゝしばらくむまゝ谷川の名ばかき行ぬくぶれてを
上らせる人もなくぱがし山路。峯の岩木。上げきゝ
りと木曽の方はし海こゝ見しゝ生ゝ此世のおりひ
でゝし死ゝく後世のがこ法けとせんとまで見ゝく侍る。
あづさしそおりし語き前と少し悪し。思ひ侍るしり。
物のゞぞ山をあらざるまゝり。雪を此れるまゝ。むさし
雪のし苔まゝる事しり入しまゝもむらくさ守る

草の花中くん紙いてまゝしめ天ゞ山路り入ぬまゝは穿は
の山ばらこれはそれちまゝもぞみまゝ見てしし。
佐賀の野色にまゝ袖をふぞ天かぞもなしかゝや
土曽のなるぞやの薄風をあらざ涙めれんいとぞ
思ひ河をせてく海をまゝ路りおち侍る。かゝて漸
を行りがこの渡りり今ゆきはらく山の
米ゝは僅一人おとこ二人侍り此男あさまゝるやうり
侍るおとのゞ見ばゞしゝ法りいかふ河をにゝと云に。
毎ぐとはりうちいひく語ゝ手を侍るさまし道
りは河をなるとゝもなゝ海しく侍る天ゝ頼らくしろ
めてこなれ中まゝ姫ゝは侍るまゝ下れぞとゞ河をゞちふ

やがてしーりは此僧れいふやうぞ事にの侍る家ゝ殺
りあらく評藪の行ひする事に侍り此屋をいはまこの
人ふのいまもしらんがぬく道れかど其だらなと行つまに侍り
侍るなりなるに其のあるかとり此人はおもきかゝれの
侍るまゝ行されふを侍るりずゝくふ方便のはくる
なまはゝ侍るまゝもだまゝ侍へ事なしらゝ僧は侍り
はる男ぞもも命ゝ侍さるまゝしとゝ所そこ家
は落ちるまゝ侍ぬぐ一人せんかゝことなくてありしつゞが
いと申しくて思ふるん道屋り侍らすいかゞしてあの
屋のたまうを給ふべ事にかぎ給せんと思へともかゝるは
で日りけをかゝふ事はおはじのあゆゝれちうはく

んちしてぜんだにくいと悲しく侍とくぞうもせ
ちなかへ僧は此男を今日一日れ尾のかどばりれなじふ
ちまを程まて思ひ給ふらんる事乃思ひ出でさいかゝる世に
ゝ難じまつらせんとゝく泣めりぞと侍さ所の事行る
まゝり誰を袂を其ゆるまて衆こ而るまゝもなく二人
なれぬるりぞてを省へき事なしらゝ僧は此山ふしの
殺れ中ゝり此人をかくしへくぬるりこちもないて
其後道侍るに太刀をれ持ち侍れのことを十余人
あつまるまゝ道はるゝりゝ其のゝ此男や侍りつる
とぞはゝ侍るしゝり此山伏いさくかを侍ゞぞさゝ
人をんだり事此日ゝるまゝ給せんとあるまはるゝ歟乃

給とうやぱぐる人侍りとうく又越後へとうくしそおもむき
侍りしといふるをやうてこそ打ぶし守るそやぞ又
いざおりんとうくぞるりのまぶちとうけてだせるにあり。
掛りまへからなりして令我たもうるく。越中國より
はき侍りぬ掛此山伏。せばさしくれし蜀しうどはらみ
やのぼるさまを侍りぬ。あらくとも去りくこく蜀め侍り
はまとも。ぞるうたを帯る人もうらぞまうらぬをやと。
思ひしうへどくはるまぬるしてる侍りこのぞのん
またうをかつまける山伏れ去る侍り。年来をさがへる
奴婢をうぞれまもりてぱぐきてもなき人のぞぐろ
まるけひくく。あるる後りかくしまうく。歟れおの我

をおぼんまう侍ぬまくあるまうくて我侍るゝ。あく道
のかとりに行あひ侍るまゝ。云葉のはくれ情ハ
をはとも雅のかくばりハ侍るゝ。貌世者れ同位の
大悲をかくや深くおもしゆし。常ん人乃なげさまを
あるげきとし他のよ侍こびを自れよろこびを思
へるしそれ実れ仏法まを侍るなまゝ自利自他心草
等是則名其仏書仏と侍まはだまくも此ところ
を両もり給へとなり

六 山居尼気佛往生事

近ゝ所に侍伊勢國りあるゝ山中にて紫の席むを
むうく尼の屋せをと侍へてかゝりあり称くに何

寂へきたなれ尼のなすらごをさしまゐらして気仏まゐらせ候り。
深く思ひ入らん人とまゐらせ候まゐらせ候ゆまゐらせ候かかよ
つまらじめて参たなくおはしまゐらせ候みぬ候まぐはなし
らしやと人にいひ候まはざうなり候ぞきたなくお
ほぼらん候まど思ひ給ふまゐ母身なまはざまもな
ごらかならはぼぐ候なるまゐらせいひくがいならぬるまも
候るへし候まは目ぎ候ゆく身を座にまゐり候ゆ。世をま
なるらぐ候まゐらせ候まゐ生死のおそろしさにいかぐと
おもひてだまゐ候ふ候ゆくといひ候り。実ある記候り
気仏のおもひ候てゐるまゐ候ゆ候ゆ人にも実ハ候世者
ゆしそこくだうとみくぐ候ことく命をさ　ゆる

けぐ候ハ罪の人にもとつらひ候ゆくなる時この御ま
いゆやうちと人まもしらまで去げ候人のまゐりて座の
まさ候をゐんとゆせば入参えんと思ひ候ゆ候今の日
まゆめく候ことも候しな入給ひそかいひ候まはざまハ
こそ世まゐぐうさ物にく有ける候ぐ候世者と思ひ候
まばぎ座らん人まもしらまぐ入ぎ候人の御まと
いふまちとておきゐんなへり常まどやくおくれまに
の日ハ行もせぎ候日まくまゐ気仏ゆくけまとぞ日の
あらつさよりの気仏れ参とぐ入常まは人に御申しを
思ひくおくゐるまり。御まむりひくゐ候合せくぐ候
入りたり日法のかゐれおとくぐ候ことの往生とげまたり

ゑやうの人をぞ後世にはすゝめたりかゝ御ゆゑぞ御らんぞ侍
ぬかり思ひとる事なんぞとぞ省ることなら侍まし。阿弥
陀仏にはちかひをぞ御らに傷敗なんだらすゝめ申さるを
者のまん人をぞとくりんとちかひ給へりぼまは何とくの。
世尼の往生成とぞ申さるへき生死をおそまきくぞうらを
なすべし。弥陀を信して真実おこしたり侍らざりなん
るぞ事なく趣くしあるとそおもへなんなりし。
是を申すし。梅も宿後隆終の省給思ひ出給まそもぞ
ろりなせあへて捨侍るぼまは何をかこふどもしてか。
浄土も知るへき何をもつくか焦熱の事にはをけ
何りしかまくこの花蓮の形成さうまへ。梅又すゝめ

もなくて思ひとおりふまぞしなりし生死の同に侍ま
だ恐葉おもく者ぼしくむし此又戒乃功徳をぼく
も急なくなりしたてんかなりしさらば樸花の上に寝より
もばうなき命成さへ水に上の泡よりもなやうき聲
をたもきんとくぞ阿僧祇那も遠乃苦種成うえんを
のたりれさよぼまは玄奘三蔵渡天にそのうえ海賊なん
なんりなひ給へるとあがきらぬくぞ何に電光朝
露に身のためりぞ阿僧祇那も土を此苦種をうえん
やとのこまひし時海賊さとりを知らず侍ましくがし
らおろして侍ましし侍る是実にいこし知識り
たんなるべ本なりあらされだ呼めば發んぼくなり

侍りバ今もかゝるハざらんまゝくもだんこの〻 給ひて身
どくにし給ひ侍るべきぞ一返れ老仏なれども世れたゝにと
思ひ忍ぶ侍らんだなどの阿弥陀仏ゞんすごさせおりし
まゝ色ゑおもまへみしく侍り者るゞ伊勢の尼のんり
なゝだおりて侍る

七 小聖篁嵯峨殿詩作事

むし嵯峨の皇ぶし山の犬井川れかとりゝ御前
をさゝれおりし間して嵯峨殿とゆゝく同出度ゆゝし
くばくるみぐゝ間くのゝなゝ山の立ゆりなく
て詩りんとく間るゝ程まそ侍るゝ世月初めれ
十日れこ給帝はじめて御幸れ侍り事ゝ小聖

毎りむらも侍事し侍るゝ帝たのむらをめさ
まゝく御おれ聖篁のたし者ぢと詩りはくるまゝく
事れど御のあるゝ侍るゝだらむらるゝ御へ
紫塵娘蕨人拳手碧玉家ら蘆錐脱嚢とはくれ
ゝてまつり者まはみゝど上れりゝ御がんあるゝ事
おりなされまゝりおかくの人を越くぐ度まつ
給まゝりゆゝし者面同ちるゝ事ん拵りしだらむら
逝去れ故大唐よりの樂天の詩ゆゝもなおくり者るゝ
蕨娘人拳手碧玉家ら雅脱嚢といふ詩侍りぢ給ゝ
すゝしこと篁れ詩りたがりぞぢとだハ御かゝまゝ
時れ秀才の人ゝ乃中事るゝ篁れ自ちる試めてしし

あらくはたまたま氷見しあらく苦れ鬢やくあらにあら
ちまたく柳をかくことはまたは苦見ぞ者とすると木草の
りとまゝなるゝやまくあめまたり也て面白う侍り

九 清信公并野相公事

むかし延喜の帝の御位の時清信公中納言にてお
りしあるに右大将にかゝり給へる宮崎の下侍り
あるとし滝山晴季将軍之在家頻の波閑蔡征廬
之末仕と書く大将を辞しゆ給へりしをおとゝり
御感侍りて大納言になりしせ給ひて一位をうけ給
ひしかり是も今の名自は書くあいで大将をとゞし
ゆけまゝあらまし人がくまて面目ゆとうし給ひし

むかし仁明の時と云野相公ゆゑにあらはれ隠岐の雲へ
なすがけまた侍ゆゑ事なりし美里東東河再日一生面皇
是も襟と作まり帝ゆゑしめけまたく流罪に成
ゑて給ひし右れ者まことも綸言まで下ゆゑ侍り
あるゆゑどうしたらなくてなりし事けまたんなりぬ
次年めし返けまたあるとし去年の再日の名自よりは
と我御下されあるゝ実も有りて給ひし侍り美里の
侍りまでよひて一生面ぬまおもむきたん実かれしかる
ゆゑし掃も此篁の隠岐国にし流さまたくおりまゝ面
おきの此清里舟の御ゆゑ流ふうりひて御ゆかれ
ぬる故見たく

和田氏宗八十嶋ノ事ニ出ぬと人まゝはあまよ
あきのほり氣とよみてけり詩ことなる人ハ哥を
とよくをめりけるこそ誅りおもしろ風情ならん
とぞつまくゆりしなら侍り

十 大江相公并白樂天詩之事

むかし大江相公常陸介なりしなりしく下ちまゝ守るなり。
信濃國にてぐまゝ守りしなり。舊里あしく吾を
思ひぬるまゝ。ぞ何事ぞ此あるべきにやと思ひさつぎて人を
かゝりしまゝ時。前途程幸乱思於鴈山之暮雲後會期遥
落纓於鴻臚之曉渡と云詩ぬりあり。使いまゝ都ありしほ
ざ侍り。相公の文詞乃義燒まゝり。是がたゝや此人立てく

夢ゆり思ひおもしろくまゝてゝ。ぞんて守るなり侍り
さて此詩を帝にしめしてゝ。老き朝綱に先しも
侍まゝ事おもしろ。伊与國を給ひたりと云ひ
まゝて事を侍まゝとも。常陸へもとゝ給ひて都ありしへりの
かゝりて相公ありしほうちまゝ。一國を給せりたる。男に
とりて面目をきはめり。実此詩のさゝ給ひ。ぞ不と見て
あれはなん侍り。まゝ途ありしおもひてゝ思ひを鴈
山の暮れ雲ありしを。後ゝ云をたゝりに都せんなりぞと
おもへてゝんなり
むかし唐國の白樂天ぞとゝ此もれをすれ侍りまゝ
こゝまゝ。義陽乃江のかとりになりぞれ侍りたゝ

宮途自此心も別世る從今口不云とはくり給へり
あまは海辺の事もにうかひく渡をなげして火なる
なりしくなれ世のこれをなら同しかへて波す人
侍るなり寅とかごらぬ天ふくはしさはけしそさ
あひと侍るへきなりしなさへ左遷なりしなさ侍るは
庚寅ことも無下に心をとりしてこそ侍き

十一

小野大臣之御事

むかし延喜の御時小野の大臣事なりしかくまゝ病れ
國へなかなき給ひしは父子の事なりしかへ
るゝなりしなきまゝ給ひしに御讀さらにはんくわりぞ屋こそり
海よへるさゝちし給ひしかるなりしたゞ侍れ

雲井乃かりかりしゆまく侍るましかは

家爲遷客汝來寅其是籌之梳漂分
峙枕思量飯去日家知何果海明長

とはくり給へり事るおもしまり侍る寅と大臣を遷客
侍るを來寅とまゝ侍まことなりしなる梳れなりし
分をしぬぐにかせり聞り梳をそむこそ舊里にかへら
むかしをはかるなり侍るを又のとし此長なり大臣は雲
まゝ此のなりしかくおもしまに侍るはけりしまゝ
そ御身を聞るまゝくいまなりしかそもしく又
離家三年月落渡百子行萬事皆夢時々行彼蒼
と云侍をぬまはこゝ朴此御詩なるまゝ遠和此をもの

年ごろの流ごとしよりぞ思ふるしやうあるとしてぞ不思議の事ぞかし侍ける
侍るべき身は文も能なれども入るまじきにはあらねども殿上して庭に
まゐる所しけり侍りけるかやうなる雅まかりて天下けるをしける所を我もこん
此延喜の帝を。仁徳秋津洲の御まなすがた恵みは先皇の
山の影とさま志を申ちかひて道には遠きをしとてならぬ
いま跡ぞ見しに少将道程を流して
侍りしかしかるべしるゝ時やらんさえ侍れ

【十二】直幹流罷伏して神勅有に優免す

むかし橘の直幹といふ文章博士秀実をかねありしく。
なかるく侍りしころ、明日なん宣下ありける一番
侍りけるを先世の宿執ありしとを田侍るぎ

むかしこ流の文字を侍りし学士を別当ぞくく位
なきまう殿上の事を嫉みて恨ぎりんけれど大かた有しと思へ
て少将しそかやうの事にそれをみたまふものから。
おりまし侍ちる事ととくなる程さけれて見奉らるなら
さくよのも侍りて祈請し侍らみ暁がたり御殿の扉
まで開きて、言がきこえ出ければ。道風しとぞおぼえ給ふ
道風のしるまくげく人すての板作不さしやうにこれ
直幹が歎きの中ありし秀実にて侍るは御免除ある
云々状のおもく直幹りしがるをしとおぼしまして女中にて
ありしかば、かたの御はから見えなく。かく見えて
御かしこまりて座を去り。さかけそ出るを覚しめして文を

ふまの院よりぎつとなげ出れ事ある。直轄いとゝ御ひ
ひくくんまは文章博士橘直轄仇云実為勅勘事
也こゝ不便也。於今度者可有御優免之由。云神之御
氣色作小聖花風事也。とかくれたりよ給こびなりて
宿ゝ急き海りてぶとの侍り者るありさ海を。乗く
出ゝく此仮紙幾雪し侍る小数童大きにも弱る起あ
まて道風が自書此中文を記しけり海くれ。云法二年
正月十日あまりのころ。近江国城ゝある伏。紫宸殿ノ
皇后七回出賢聖之障子大嘗会之寶祚或度蠶盡
圖之屏風視三朝之法化身於蛙沉本朝隔萬里之波
涛名是得據唐國こかゝ事海ノ手給ひし。伴きたりとに

がきたりへまで帝おそれをちるさせ給ひくく流罪ぬ
給ひくぐなまりさへ日此中にする或ア大備ありなるを侍
ありがまあらうまゝそ見えし侍る